

大学は、何を目的に教育する所か？

軽度であるが自閉症的行動（ある機関で「広汎性発達障害」の診断）のある子どもと、ボランティアとして係わっていた学生から、「T君を（この4月から入学する）小学校の先生が見にいらっしやったようで、『この子は、自分のことを伝えられない。自分の言いたいことを伝えられるようにしておいてください。』と言われたそうで、お母さんが『これからの課題なんです……。』とおっしゃっていました。これって、変ですよね。」のメールが入った。

正に、変な話。「こうした先生を送り出す教員養成大学を含め、いったい大学教育は、何を目的とした教育を行う所なのかなあ？」と単なる私の愚痴として、多くのメル友に発信した。

「愚痴なので、聞き流してください。」にも拘わらず、ありがたいことに多くの返信があつた。その返信の中に、こうした事例を単にその先生の資質の問題に帰着するものが少なからずあつたのが、実際に担当される子どもや母親は、たまったものでない。

こうした事例を持ち出すまでもなく、最近マスコミでも騒がれている医師の「ドクハラ」しかり。入浴介助時に「時計を外すように」と指導されても、「防水時計なので大丈夫！」と答える保育実習学生しかり。教員免許取得の必修である介護実習先で何か指導されると、ふて腐れて部屋の隅に座り込む学生しかり。こうした例にはいとまがない程、見聞している。最たる例が、日本でも最高学府に類する大学で、高度な知識と最高の技術を学んだであろうが、それらを結果的に多数の命を奪うことに利用したあの忌まわしい事件を持ち出すまでもないだろう。

全ての根は、「大学教育は、何を目的とした教育を行う所なのか」ということであり、そのことを思考させる語りかけが学生に十分なされているのかというのが、私の危惧である。

返信の一つに「私は学生時代に、もし、阿部さんにも出会わずにいたら、今の自分では無いように思います。もしかすると、思いやりのない先生になっていたかもしれません。」があつた。私は学生には、「知識・技術は単なる手段。目的は何かは、常に自分で思考する！」としか云わない。思考する力さえ身につけてくれれば、現場でも、対象児と自分の共通の目的は何かを、相手の立場に立ちながら、思考（苦悩）し続けてくれると思うからである。

（2003年02月17日記）